

意研究の概観とご自身が提案する新しい特徴統合モデルについて御講演された。従来の注意による特徴統合モデルを覆すものであり、活発な議論が行われた。

参加者は、初日が 32 名、二日目が 28 名の計 60 名であり、全体として盛会であった。心理学、特に知覚心理学を専門とする研究者の参加がやや多かった。今後は、より広い専門分野の参加者が増えることも期待される。

VR 心理学研究会は、年に 2 回開催される。今回は 16 回目であり、長崎では 2 回目の開催となった。メンバーに九州の方が多くこともあり、長崎、福岡、鹿児島、沖縄などで開催されることも多い。かなり小規模な研究会だが、基礎心理学とバーチャルリアリティの融合が中心テーマの 1 つであり、日本基礎心理学会の会員の方の参加が増えることを願っている。なお、次回は 2011 年 7 月に富山で開催予定である。

④第 2 回錯視コンテスト

開催日：2010 年 11 月 27 日（土）

開催場所：関西学院大学（第 29 回大会懇親会）

申請責任者：北岡 明佳

研究集会要旨：2009 年の第 1 回錯視コンテスト（北岡，2010）に引き続き、2010 年 11 月 27 日の日本基礎心理学会第 29 回大会（関西学院大学）の懇親会にて、第 2 回錯視コンテスト（の授賞式）が開催された。このほど日本基礎心理学会から研究活動助成金を頂いたが、錯視コンテストとしてはこれが初めてである。助成金は副賞の購入費に充当された。授賞式の参加者数は筆者の目算では 150 名程度で、そのうち数名は受賞者の一部を含む非会員であった。

作品は電子ファイルの形式で募集した。作品の著作権譲渡を心配する声にあらかじめ配慮して、著作権の取り扱いについて明記した。募集資格には特に制限をかけなかったが、日本基礎心理学会会員からの応募が多かった。応募のあった 23 作品から、(1) 学術性（新しいか）、(2) 表現性（わかりやすいか）、(3) 美術性（美しいか）の 3 つの審査基準で得点化した。上位 10 作品を入賞とし、一番得点の高かった作品をグランプリとした。

グランプリは、山口大学の長篤志氏らの「道路写真の角度錯視」であった。この錯視は、道路の両端の網膜像の成す角が鈍角でも鋭角に見えるという現象である。ツェルナー錯視やフェウオール錯視など

の古典的角度錯視では錯視量は 2~3 度程度で、多くても 5 度程度であるのに、「道路写真の角度錯視」は数十度の錯視量があることが注目された。擬人化して言うと、これを角度錯視の仲間に入れてはいじめに遭うのではないかと心配になるほどの突出ぶりである。

実は、グランプリ、2 位入賞作品、3 位入賞作品の得点差は僅差であった。2 位は、北星学園大学短期大学部の中村浩氏の「明るさグラデーションのある図形の運動方向による明るさの違い」であった。これは、運動誘導性の明るさフィリング・イン現象の一種である。3 位は、藤本清氏の“BU Illusion (Bold by Underline Illusion)”である。アンダーラインが太いとアンダーラインを引かれた文字も太く見えるという錯視である。「太さの同化」という新しい概念ではあるまいか。

その他の作品の紹介はここでは省略するが、応募作品は下記ウェブページにまとめて示してあるのでご覧いただきたい。

<http://www.psy.ritsumei.ac.jp/~akitaoka/sakkon/sakkon2010.html>

引用文献

北岡明佳 (2010). 第 1 回錯視コンテストの報告
基礎心理学研究, 29, 63-67.

⑤第 2 回多感覚研究会

開催日：2010 年 12 月 4 日（土）

開催場所：東北大学片平さくらホール

申請責任者：北川 智利

研究集会要旨：近年、複数の感覚モダリティを組み合わせたときに特有に観察される現象についての研究が盛んになっている。そうした流れを受けて昨年頃から多感覚研究会を開催している。第二回の今回は東北大学片平さくらホールで開催された。参加者は 88 名で、2 件のチュートリアル講演、40 件のポスター発表が行われ、半日の開催ながら昨年と同様に盛況であった。チュートリアル講演では、まず NTT コミュニケーション科学基礎研究所の渡邊淳司先生に『「感覚のものさし」としての言葉の音韻、「存在のマーカ」としての音の定位』と題して、触覚経験とそれを表現する言葉との関係、また様々な場所から提示される音声から経験される空間と自己の関係性について興味深い講演をしていただいた。次に東京大学の渡邊克巳先生は『多感覚相互作用における顕在的・潜在的過程』という演題で、ご自身の豊富な研究成果を元に、視覚と聴覚の相互作用に関